学校と家庭での教育の連携

小河原祥

今まで小学校から高等学校までを卒業し、大学で心理学を学ぶ中で教育について考えていることをここで述べようと思う。私は学校という場での教育と、家庭という場での教育の連携が子どもの能力を大きく伸ばすための要になっていると考えている。

まず、家庭科という科目に焦点を当てて考えを述べていきたいと思う。最近は、料理の経験の少ない子どもが増えているという。親と一緒に料理をしたことがない原因は、子どもが親の手伝いをしていないこと以外にも子どもの孤食が増加していることや、親の仕事が忙しいため親自身が出来合いの食事を買ってきて家であまり料理をしなくなったことなどが挙げられるだろう。そんな子どもたちがどこで料理をするかというと、学校の調理実習である。小学校高学年から中学校で行われる調理実習で料理の基本を全て学べるかというと、自信をもって頷けることではない。その結果、将来一人暮らしを始めると、外食や内食といった誰かが作った料理を買うという方法で日々の食事を済ませることになる。また、同じ家庭科の分野でいえば、子どもの裁縫の経験も少なくなってきているだろう。ミシンが家にある家庭が少なくなっている可能性も十分あり、そもそも針や裁ちばさみもない家があってもおかしくない。そういう子どもたちがどうやってズボンやスカートの裾上げをするのかというと、購入時にそのお店でやってもらうか、その服を売って自分の丈に合った別の服を探すという方法を取るのである。ボタン付けがきちんとできる子どもはどのくらいいるのだろうか。ボタン付けは学校で習うが、そもそも最近の服は縫製がしっかりしているのでなかなかボタンが取れないのでわからない。

上記の事柄について、今はそういう時代だから問題ではない、と片付けてしまっていいのだろうか。私の家では、私が小学校中学年の頃から朝食の果物の皮剥きは私の仕事だった。りんごや梨が剥けるようになればジャガイモも剥けるようになり、ジャガイモが剥ければたいていの野菜の皮剥きはできるようになる。私は母とほぼ毎日料理をし、高学年の頃には親が忙しい日に一人でカレーや肉じゃがを作ったこともあった。裁縫に関しても、小さい頃母が父のシャツで私にワンピースを作ってくれたり祖母が体操服の穴に布を当てて塞いでくれたりしていたため針と糸への興味は強く、小学校二年生の頃にはフェルトやあまり布でマスコットのようなものを作って遊んでいた。高校の卒業式の日の朝に制服のボタンが取れた時も家庭科の先生に針と糸を借りて自分で直し、今もお気に入りのシャツ

の袖の折り返しを留めているミシン糸が切れた時などは自分で直している。

小学校の頃から家庭科に関しては親からいろいろ教わっていた私からすればこの程度のことはできて当然のことであったが、友人たちは「すごいね」と言う。私は家庭科の英才教育を受けていたのだろうか。私はそうは思わない。時代を二百年三百年さかのぼれば、その頃は女性がほとんどではあるが、祖母や母から料理や裁縫を習っていた。時代が変わったとはいえ、衣食のことは生活の基本的な部分であり最低限できるようにしておきたいことである。その最低限を、学校の教育では補えないと私は考えているのである。家庭科の授業は、いかに現代の子どもが料理や裁縫の経験が無いかを明らかにするための場になってしまっている。

私の母は昔、中学校の家庭科の教員をしていた。その授業内で保護者に自分の子どもの料理能力を知ってもらうために調理実習にお手伝いとして参加してもらった時、参加していた保護者の方から「私の子どもがこんなに料理ができないなんて思っていなかった。これからは毎日手伝わせようと思います」という感想を頂いたという。その話を母から聞いた時に、家庭科は成績のための授業にしてはいけないと強く思ったのを私はよく覚えている。家庭科という科目に関しては通知表という形ではなく、毎週の「家庭科便り」のようなものを作り家庭と連携させなければ、家庭での料理や裁縫経験などの理論的な部分を学ぶのが学校の家庭科、という形にしなければ、家庭科という科目名にも関わらず学校だけのものになってしまうだろう。

家庭科以外にも、私が家庭との連携の必要さを感じるものがある。それは小学校の算数や漢字書き取りなどの宿題である。小学校の宿題は友だちとやることが多かったが、小学一年生の頃や高学年になって難しい問題が出た時は親に聞きながらやった。親がどう教えたら分かりやすいか試行錯誤しながら説明してくれたのが無性に面白かった記憶がある。学校の授業でわからなかったことを、全て学校で解決する必要はあるのだろうか。むしろ学校で解決してしまうことで、学校の授業のことを家庭で話す機会を奪ってしまってはいないだろうか。

子どもが勉強に意欲的に取り組もうとするためには、学習環境にいる人たちとの信頼関係やその人たちからの賞賛や心理的サポートが不可欠である。つまり、信頼している先生や親から褒められたり励まされたりすることで、子どもたちはもっと頑張ろうと思えるのである。現代の学校は、学級一つあたりの人数が多く教員の目が生徒全員に届きにくい。また、両親共働きまたは片親の家庭が増えたため、親子の交流できる時間が短くなった。

そんな環境で、子どもたちは誰から賞賛や心理的サポートを受けて勉強に励むのだろうか。学校と家庭と、どちらの方がその児童・生徒のことをしっかり見ることができているのだろうか。問題に直面した時、彼らはどちらを頼ろうと思い、彼らの状態にいち早く気付けるのはどちらなのだろうか。

この問いに関しては、どちらだと断言するのではなく両方であることが求められるのだと考えている。大切なのは、学校と家庭の両方が子どもの小さな変化にも敏感に反応し、互いに連絡を取り合って子どもの問題解決を支えることである。私も小学生の時は何度か友だちとひどい喧嘩をしたことがあり、中学生の頃も学級内の問題で悩んだことがあるが、そのどちらでも親と教師の片方ではなく両方が動いてくれたため私はその問題を乗り越えることができたと感じている。そしてその陰には、私が親のことも先生のことも信頼していたことがあると考える。

学校と家庭とで行われる教育を、それぞれ分けていては学校生活も家庭生活も上手くいかないものなのではないかと私は考えている。学校と家庭は別のものではあるが、子どもだけはその両方に所属しているのである。家庭だけの支援者と学校だけの支援者しかいなければ、学校と家庭の中間にある問題は子ども一人で解決しなければならないことになってしまう。学校と家庭が連携していれば、そういうあいまいで複雑な問題は学校と家庭の両方からサポートして解決まで導くことができる。子どもが毎日楽しく学校へ通い、いい気分で家に帰ってきて、その両方で身を入れ勉強するために、学校の教育者と家庭の養育者の両方に、共に子どもの成長を見守っていってほしいと私は考える。